

MMG (Mobile Museum GIS) の構想と開発の進捗状況 The Development Plan of Mobile Museum GIS

○山下裕作* 友松貴志**
(Yamashita Yusaku) (Tomomatsu Takashi)

本企画セッションによって報告する諸研究の目的は、それぞれ多様であり、それがゆえに成果は多岐にわたる。研究代表者として、敢えて本研究群に共通する目的をあげるとすれば、それは「新しい民俗誌」の構築による「郷土研究」の再生である。

「民俗誌」とは、「ある社会の人々の民俗を描写した記録」であり、その作成は民俗学の主要な目的である。しかし、社会は常に変動し、目の前の人々の生活すら正しく理解することはとても難しい。それゆえ、より正しく言えば「ある社会の人々の、生活の全体像である民俗を正しく理解し、正確に描写しようと努めた苦闘の記録」が民俗誌である。

良い民俗誌とは、民俗学徒と地域生活者たちの相互理解の賜であり、相互理解に至るまでの対峙と相克と協働と協調といった苦汗に満ちた営為の末に出来た生活文化の記録である。しかしながら、我々が実際に民俗誌を目にするのは、かび臭い図書館の薄暗い一角であろう。ほとんど読まれること無く、貴重な記録として放置されている。

だが、報告者は民俗調査に起因する実践活動の経験をいくつか持っている。島根山中の準限界集落で、サの神信仰と川魚ハエゴの伝承を聞き取りしていたら、30年ぶりに地域生活者による河川管理活動が復活したこと。また限界集落である村では60年前の生業の調査を実施したところ、話者の高齢者が、かつての村の生活の様子を沢山の絵として描き、それを切っ掛けとして10戸近くの若い他大家族が集落に戻ってきたこと。さらに岩手県岩泉町で、(手抜き)講演として岩泉郷土誌の内容をそのまま話したところ、住民たちが盛り上がり、その場で活発な伝承活動が始まったこと。これらを見ると、民俗調査は地域住民の何らかの意欲を刺激し、その生活の場である農村や、生業である農業の維持・活性化に効果があるものと考えられる。

ところで、農業・農村の危機とは近年に始まった事案では無い。農山村の「過疎化」は既に50年ほど前から喧伝され続けており、その50年もの月日が「高齢化」をもたらしている。戦後まもなくから「ムラの解体」、もっと遡れば、戦前の「農民層分解論」と、「農山村の危機」はすでに100年近い伝統をもっている。そうした中で、民俗学徒たちは山村生活調査や緊急民俗調査、地方誌史民俗調査など全国的な民俗調査を数回にわたり実施してきた。そうした中で民俗学は村について「伝承母体論」を主張していく。農山村は生業や芸能や祭礼・行事等々、固有の文化を伝承・継承する母体である、というのである。村の危機が叫ばれる中、村は様々な良きものを継承する母である、村が無ければ文化は継承されなかったし、今後継承されないだろう、と言うのである。

この民俗学徒の確信は、おそらく民俗誌を作成するための民俗調査の中ではぐくまれた。

*熊本大学社会文化科学研究科 ** (株) イマジックデザイン *Kumamoto Univ. **Imagic Design Co Ltd.

キーワード：農村振興 社会計画 測量・GIS

また、分解だ！解体だ！過疎だ！高齢化だ！限界だ！と苛まれた続けた村の生活者たちも、民俗調査の過程で、先祖や祖父母、そして父母や自分自身の生活で育まれた様々な知恵や技能の存在を再発見し、危機と言われる現実に立ち向かおうとしたはずである。それゆえ、民俗誌は、記録そのものが重要なのでは無い。その作成のために調査者と生活者の協働として実施された調査活動にこそ価値があるのである。

ちなみに、民俗学徒は民俗学者と必ずしも一致しない。先に岩泉町の事例を挙げたが、この岩泉郷土誌の作成のため民俗調査を行い、記録したのは、この岩泉町を故郷として、岩泉町に暮した生活者である。学者ではない。生活者が自らの故郷を自律的に研究し記録することを「郷土研究」という。いや、郷土研究は記録に留まらない、研究し、記録し、そこで問題点を見だし、さらに故郷について研究し、それを後継に繋ぐ、終わりの無い営為、それこそが本来の「郷土研究」である。

現在、その終わりの無い営為はどうなっているか。残念ながら途絶していると言っていだろう。かつて民俗学徒として郷土研究にあたった生活者たちは高齢化し、中央の民俗学会は理論やら、政治性やら、構築主義やら、世界を目指すやら、新しい民俗学を唱えながら、その中身は静的に趣味の領域にまで高踏化している。全く新たな方法で郷土研究を再生し、その成果である民俗誌を、より実践的な方面へ発展させて、地域の保全や振興に繋げなければならない。学問が現実の用たることを恥じない、と民俗学の祖である柳田國男は言った。そして、渋沢敬三は当時の最新技術を用いて民具研究を推し進めた。現代の主要な実学として、新しい技術を用いて「郷土研究」を再生させ、地域実践活動のツールとしての「民俗誌」を構成するべきなのである。

ベースとなるのは現代の農山村生活者たちである。その現代の生活者たちが、それぞれ所有するデバイス（現状では iPhone と iPad）を用いて、日常的に地域の情報を採取し、視覚性のよい地理情報として GIS システムの架空の収蔵庫に収集する。それらはまた、地域生活者各自のデバイスへ、編集可能なデータとして還元され、整理される。そして、展示へと向かう。その展示は、外部の都市住民等の持つデバイス上（PC でもスマホでも）の一般的なマップアプリで閲覧しうる。地理データとともに新鮮な地域情報が、先達から伝承された貴重な情報とともに重層的に整理・表示される、いわば過去から現在に至る様々な情報を収集・展示したヴァーチャルな博物館である。

これまでの民俗誌も、今は書架の片隅で埃をかぶっているばかりのように見えるが、その中身には、地域の博物館に匹敵する豊富な内容を有している。それらを、日常の生活に引きずり出し、現代人の手で更新し、日常的に閲覧し、現実生活に利活用できるシステムを作るのである。

現在のところ、汎用性が高く、農村ワークショップにも活用され生活者相互のコミュニケーションにも実績を有する、農地基盤地理情報システム VIMS を用い、MMG のプロトタイプを作成中である。本研究報告では、その MMG プロトタイプの特性と機能を、今春平成 28 年度熊本地震で大きな被害を受けた、熊本県阿蘇郡西原村・南阿蘇村・高森町の事例を通じて紹介したい。

本企画セッションの諸研究は、科学研究費補助金 基盤(A)一般「地方創生に資するモバイル型地域博物館システム構築と地域個性に基づく運用手法開発」(課題番号 15H01907)による研究成果の一部である。